vol.1 No.2
compass
大原生のための 公認会計士情報誌
C.P.A. O-hara Method to Pass A State-exam Successfully
2023年1月15日発行

巻頭言 『才能はある』 P.1

特集 令和5年公認会計士第Ⅰ回短答式試験 短答式試験の全貌解明!

短答式試験の出題傾向と難度

企業法 P.4~6
管理会計論 P.6~11
監査論 P.11~13
財務会計論（計算） P.13~15
財務会計論（理論） P.15~17

過去問分析の価値と短答対策について

企業法 P.18
管理会計論 P.18~20
監査論 P.20~21
財務会計論（計算） P.21~22
財務会計論（理論） P.22

就職・転職のことなら、多くの法人との信頼関係を築いてきた
『大原キャリアスタッフ』へ

『才能はある』

受験生活は常に順調とは限らない。成果が見えないと自分の才能を疑うこともあるだろう。だが、合格に必要な才能とは継続することである。それは公認会計士を志す皆さんなら誰もが有している。

日々の勉強に自信を持てていますか？こう問われれば皆さんはどのように答えるだろう。胸を張ってＹＥＳと答える方は稀で、殆どの方は「否」と答えるのではないだろうか。

講義も休まず受講し、問題演習も毎日頑張っている。なのに一向に成績に表れてこない。まして以前解けた問題すら間違える。勉強方法が悪いのだろうか、又は才能がないのだろうか、と。

令和四年試験合格者が言っていた。「自分は頭の回転が遅い。理解に時間が掛かり、周りが２、３回の反復で済むところ、その倍以上やらないと出来るようにならない。この試験に向いていないと思った事もある。だけど本当に公認会計士になりたかった。だから量だけは誰にも負けない様にやり続けた。」

才能は皆が等しく有している訳ではない。どんなに努力しても誰もがトップアスリートや人気アーティストに成れる訳でもないのは事実である。しかし公認会計士を志す皆さんが等しく有している才能が一つある。この試験において最重要で、将来にわたりそうあり続ける。

「継続する才能」

先の合格者も「量だけは」と話しているが、本質はその量を継続したことにある。量を重ねたからと言って万事順調だった訳ではない。紆余曲折の方が多かったが、決して途切れさせることはなかった。

成果が見えないと迷いが生じる。学習方法や才能に疑問を抱くのも当然だろう。ただそういう時こそ自分自身を信じて欲しい。皆さんは試験突破に必要なただ一つの才能を間違いなく有しているのだから。

目次へ

特集

令和５年公認会計士第Ⅰ回短答式試験

短答式試験の全貌解明！

12月11日（日）、令和５年公認会計士第Ⅰ回短答式試験が実施されました。午前９時半から午後６時まで、３時間半の途中休憩は挟むものの８時間半にもおよぶ長丁場の中で、集中力を持続させ、自己のもち得る知識を総動員して戦い抜かれた受験生の皆さん、本当にお疲れ様でした。

大原の講師陣も本試験終了後に届けられた問題に目を通し、自己の出来栄えに思いを巡らす受験生の皆さんに、試験の実態をいち早くお知らせすべく模範解答作りに取り組みました。

令和５年12月12日 オンライン会議にて

【座談会出席者】

財務会計論（計算）
瀧本 祐和

企業法
高田 貢介

監査論
栗田 篤

管理会計論
水野 悦之

司会
二葉 穣

財務会計論（理論）
新井 孝志

目次へ

短答式試験の出題傾向と難度

二葉　本日は、短答式試験の模範解答の作成に携わっていただいた講師の方々にお集まりいただき、出題傾向の分析と次回へ向けての対策などをお伺いして参ります。

司会　二葉　穣

さて、出題問数は財務会計論が28問、企業法と監査論が各々 20問、管理会計論が16問と前回と同様でした。また、出題形式は、４肢６択形式の理論問題が、監査論、企業法、財務会計論、そして管理会計論で出題されました。

そこで、試験実施の順に企業法からこれらの出題形式が受験生へ及ぼす影響や、問題そのものの難度などについてお聞きしていきます。

（なお、ここで難度とは、一般的な受験生が制限時間内で正解を導き出すうえでの設問そのものの純粋な難しさの程度を、大原の講師陣が受験指導の経験を通じて判定したものであって、最終的な合格基準を判定

目次へ

する尺度ではありません。）

企業法

正答率40％未満の問題が３分の１も

高田　形式面の変化はありません。問題数は20問で、そのうち商法と金商法が２問ずつ、会社法が16問でした。出題形式も４肢６択で正しいものの組合せを選ぶ形式で、配点はすべて５点でした。

内容面については、従来通り、条文の知識を問う肢がほとんどでした。今回もただ単に細かな知識を問う肢が多く、基本的な知識について一捻りしたようないわゆる良問と言われる問題は少なかった印象です。受験生の正答率が80％を超える問題がほとんどなく、逆に正答率が40％未満の問題が３分の１近くもあり、受験生の実力差が反映されづらく、日々の努力が報われにくい問題だったと言えると思います。

判例に関する肢は、前回と同数の７肢（問題１ ア、問題２ エ、問題３ イ、問題６ エ、問題７ イ ウ、問題16 ウ）でした。このうち問題３ イ、問題７ イ の判例については、多くの受験生が知っているものであり、正誤の判断は容易だったと思いますが、他の判例については、知っていた受験生は少なかったと思います。

令和元年改正に関する肢は、前回よりも２肢少ない５肢（問題５ イ、問題９ ア～ウ、問題17 イ）でした。

目次へ

企業法　高田 貢介

二葉　内容面について、具体的に教えてください。

高田　商法は、問題１が商人、問題２が匿名組合に関する問題でした。問題１は、アの肢で間違ってしまった受験生も多かったと思いますが、イとウの肢から正解に辿り着いて欲しかったです。問題２は、比較的正解しやすい問題だったと思います。

金商法は、問題19が金融指標、問題20が親会社等状況報告書に関する問題でした。問題19は初めて見る受験生がほとんどであり、今回断トツで正答率が低い問題になってしまいました。問題20は問題19に比べるとマシですが、それでもかなり難度が高かったと思います。

会社法16問の内訳は、設立２問、株式２問、機関６問、資金調達１問、社債１問、計算１問、組織再編２問、持分会社１問で、基本的には例年通り万遍無く出題されています。なお、機関の問題のうち問題10は

目次へ

実質的には種類株式の問題ですから、そう考えると、株式の分野から実質的に３問出題されたことになります。

全体的に見ると、今回も細かな知識に関する肢が多かったことや、金商法が２問とも非常に難しかったこと等から、思うように点数が伸びなかったと思います。少なくとも、高得点を取るのは難しかったと思います。最初にお話したように、受験生の正答率が80％を超える問題がほとんどなく、逆に正答率が40％未満の問題が３分の１近くもあったことからも、今回の問題がいかに難しかったかお分かりいただけると思います。合格ラインは前回よりも低く、60点といったところでしょうか。

二葉　ありがとうございました。企業法は例年になく正答率が低い問題が多く、苦戦した受験生が多かったようですね。では管理会計論はどうだったのでしょう。

管理会計論

解答の精度次第

水野　今回の短答式試験も昨今の出題傾向と同様、全16問でした。難度は前回と同程度と想定されます。前回は、前々回と比べてボリュームが減少し、一部の難解な問題を除けば、一通り手を付けることができましたが、今回もその傾向が継続されました。計算問題はパッと見で難度が予想できる問題が多かったです。そのため、想定以上に深入りしすぎることはなかったのではないでしょうか。普段の演習を通じて積み重ねた

目次へ

トレーニングをそれぞれの問題に照らして、解き進めていくことが重要でした。理論問題に関しては、久々に、誤っているものの個数選択問題が復活しました。この問題も含め、問題量は前回同様、比較的想定通りのボリュームといえるでしょう。計算：理論の問題数の比率はここ最近の傾向通りで、計算８問：理論８問（配点でみると計算60点：理論40点）となります。出題内容としては、前半８問（50点）が原価計算、後半８問（50点）が管理会計の範囲と、万遍なく出題されておりました。時間のかかる計算問題もあるため、時間内に全ての問題に着手することは困難でした。正答ができそうなＡランク問題を見極め、確実に点数を積み上げることができたかどうかが肝となります。

前半８問は計算問題が４問、理論問題が４問の出題でした。計算問題では、問題６ はボリュームも多く何より難度の高い問題でしたが、その他の計算問題に関しては、日頃の計算練習をしっかりとしていただいていれば十分に正答可能な問題であったと考えられます。理論問題４問は「原価計算基準」から３問、「原価計算基準」外から１問出題されました。「原価計算基準」からの出題については、全体としては基準からストレートに出題された問題が多かったため、しっかりと基準を読まれていた方は正答が可能であったでしょう。ただし、個数選択問題の 問題３ は、量も多く、また、やや細かい点からの出題でしたので、難解であったといえるでしょう。

後半８問は計算問題が４問、理論問題が４問の出題でした。計算問題は、やや手間はかかるものの、日ご

目次へ

ろの練習の成果が発揮される問題でした。一方、理論問題に関しては、前回の出題と同様、テキストをしっかりと読んでいただいていれば正答可能な選択肢が多かった印象です。

管理会計論　水野 悦之

全体を通じては冒頭でお話をしました通り、やや難解な問題からは早めに手を引いて、解くべき問題の取捨選択が勝負の分かれ目になる出題となっておりました。短答式試験は相対評価の試験となりますので、正答率が高いと想定される問題をどれだけ確実に得点していけるのかがとても重要です。管理会計論はここ最近、基礎的な問題に絞って冷静に点数を積み上げれば、稼ぐことはできなくとも大崩れしない安定した点数を獲得できます。無理に応用的な問題に手を付けず、得点すべき問題を確実に正答する姿勢を持っていただきたいです。

二葉　今のご説明で全般的な出題傾向はわかりまし

目次へ

た。では、次に各問題についてのコメントやランクについてお願いいたします。

水野　難度のランクを総括すると、Ａランクの問題が11問、Ｂランクが３問、Ｃランクが２問でした。Ｂランクが 問題３ 、問題11 、問題14 、Ｃランクが 問題６ 、問題９ となります。ただし、個々のランクと問題全体の難度は必ずしも一致はしません。

まず計算問題です。 問題２ は典型的な費目別計算の問題でしたので、しっかりと正答して頂きたい問題です。 問題４ は計算の手間の少ない個別原価計算の問題でしたので、時間をかけずに正答して頂きたい問題です。次の 問題６ は正答することが非常に難しい印象の問題でした。連産品の計算においては、正常市価を算定して結合原価を按分する、という練習を積み重ねてきていますが、今回は、連産品の見積売価を使用して按分する問題と考えられます。なお、本問ですが、冒頭文に「当月よりＣ製品の生産を開始する」と記載があるものの、月初仕掛品が生産データに与えられている点で、齟齬が生じておりますので、何らかの措置が講じられる可能性もございます。続いて、 問題８ についてもパッと見のボリュームが少なく、グラフを丁寧に書けば、きちんと正答できる問題でした。 問題10 はやや時間はかかるものの、推定の問題は何度も練習しましたので、題意の把握をしっかりとし、「税引後売上高利益率」である点に気を付けて解くことで、正答が可能な問題といえるでしょう。 問題12 は穴埋め３か所のうち２か所は短時間で埋

目次へ

められますので、残り時間に応じて、２択の一方の数値をあてはめて解答するか、２択のままで選択するか、となったかと思います。問題14は検討している代替案をきちんとつかめれば、時間をかけずに正答することが可能な問題でした。もともとこの範囲に苦手意識のある方は、避けてしまったかもしれませんが…。問題15に関しては、１ページを超える問題でしたが、平易な問題でしたので、確実に得点することが望まれます。

次に理論問題ですが、まず、原価計算の分野は、問題１は原価計算基準から、材料費に関する典型的な問題でした。誤りが明確であり、正答が望まれます。問題３は個別原価計算に関する問題でしたが、誤っている肢の個数選択問題であり、形式的な面で驚かれたと思いますし、少々細かい部分からの出題でもありましたので、難しく感じたことと思われます。続いて、問題５は、典型的な問題でしたので、正答が望まれます。問題７は、原価計算基準外からの文章もありましたが、正誤判断はしやすかったのではないかと思われます。続いて、管理会計の分野ですが、問題９は短答理論対策で学習した内容も関連しておりますが、難解な問題でした。選択肢エはしっかりと見極められたと思いますので、選択肢が絞られたかと思います。問題11は、選択肢アとウは容易に判断できますが、あと一つがやや難解であったのではないでしょうか。問題13に関しては、典型論点からの問題でしたので、ある程度自信をもって解答できたのではないでしょうか。最後に問題16はやや悩ましい選択

目次へ

肢はありましたが、誤っている肢の判断がしやすかったのではないでしょうか。

今回も、Aランクの問題を見極め、それを確実に正答する力が要求されておりました。Aランクの問題で指示の読み飛ばしや読み間違い、計算ミス等による間違いやタイム・ロスがあると点数を積み上げることができません。いかに手堅く点数を積み上げることができたかが勝負の分かれ目でしょう。これらすべてを考慮しますと、管理会計論で望まれる点数は65点程度となるでしょう。

二葉　問題集や演習を通じてAランクの問題を確実に解答できる計算力と、「肢別チェック」を通して誤っている肢の判断力を身に付けていくことで十分な点数が確保できたということですね。

さて監査論は、前回の短答式試験と比べると、いかがでしたでしょうか。

監査論

前回よりやや難しくなった

栗田　形式面は前回と同様で、4肢6択の問題が20問出題されており、問題2を除き、正しい肢の組合せ番号を選ぶものでした。問題文のボリュームに大きな変化はなく、各肢に十分に時間をかけることができる程度の量であったと思います。

難度については、前回よりやや難しくなっており、Aランクの問題が12問、Bランクが8問でした。Aランク問題をすべて得点すると、60点獲得することが可

目次へ

能ですので、少なくとも60点、理想としてはBランクの問題から１～２問正解し、65～70点以上獲得したい問題でした。

今回の問題では、問題３、問題５、問題７、問題８、問題９、問題11、問題15、問題19がBランクでした。

二葉　今回の監査論で、出題内容や傾向に特徴はあったのでしょうか。

栗田　毎回出題されている公認会計士法等の法律は問題３～問題７、内部統制報告制度は問題８、品質管理は問題９、不正リスク対応基準は問題20で出題されており、出題分野は前回までと大きな違いはありません。しかし、これまで１問出題されていた四半期レビューに関する問題が、二肢しか出題されていない点は、これまでとの違いと言えるかもしれません。

監査論　栗田 篤

目次へ

また、問題２の歴史の問題においては、正しい肢を選択するのではなく、肢を年代順に並べ、２番目と３番目の記号の組合せを選択するという、これまでにはない形式の問題が出題されました。ただ、内容は、基本的なものでしたので、正解できた方が多いのではないかと思います。

そして、前回は、品質管理を除くと、実施論の範囲から２問しか出題されておりませんでしたが、今回は問題13～問題17の５問出題されておりました。ただ、難度は高くありませんでしたので、テキスト・演習等でしっかり学習していた方は、正解できたのではないかと思います。

二葉　ありがとうございました。次に財務会計論ですが、計算のボリュームの変化はあったのでしょうか。また、難度も含め、内容面ではどうだったのでしょうか。

財務会計論（計算）

やや易化

瀧本　財務会計論の出題形式は、前回までと同様に全体で個別問題が22問、総合問題１問（設問6問）の構成は変わらずでした。個別問題のうち11問が計算問題で、200点満点のうち112点が計算問題に配点されています。一部応用的な問題がありましたが、全体的には解きやすい問題でした。

個別問題は、平易な問題が中心でした。基本的な事項について網羅的に学習してきた方であれば、８問程

目次へ

度の正答は可能な問題でした。

総合問題は、いつもどおり連結財務諸表からの出題であり、大問１問（小問６問）の出題でした。部分点の確保は容易であり、４問程度の正答は可能な問題でした。

二葉　財務会計論（計算）の問題を解くにあたっては、どのような点に留意する必要があったのでしょうか。

瀧本　平易な問題を確実に解答して点を積み重ねていくことが大切です。普段の演習からそのような解き方を実践してきた方は、十分な得点が確保できたでしょう。

二葉　なるほど。では、個々の問題についての具体的なコメント及び難度をお願いします。

財務会計論（計算）　瀧本 祐和

目次へ

瀧本　個別問題のＡランクは、問題５、問題６、問題10、問題12、問題16、問題22です。これらの問題を確実に正答して点数を積み重ねたいところです。演習でも対策を重ねてきた論点であるため、苦手論点を作らないように網羅的に学習を進めてきた方は点数を積み上げることができたと思います。

個別問題の問題３、問題４、問題17、問題21はＢランクです。手薄になりがちな論点であったり、見慣れない資料などが含まれている問題であったりしますから、Ａランクと比べると正答しづらい問題でした。ですが、普段の学習で身に付けた知識をベースに問題文を丁寧に読み取ることで正答につながります。Ａランク、Ｂランクから８問程度を正解したいところです。なお、問題14はＣランクです。

問題23～問題28が連結財務諸表の総合問題です。在外子会社が１社と比較的解きやすい問題でしたが、問題24や問題28は集計力が問われていますのでランクを下げています。

二葉　わかりました。財務会計論（計算）は解きやすい問題を確実に正解に結びつけることが重要だということですね。次に財務会計論（理論）に関してですが、今年の傾向はどうでしょうか。

財務会計論（理論）

前回より２問増えた

新井　理論は前回から２問増え11問の出題でした。出題形式は従来通り、正しい肢の組合せ番号を選ぶ４肢

目次へ

６択の問題でした。実務指針や適用指針の規定などを出典とする難度の高い肢も一部含まれていましたが、基本論点からの出題も多く、全体としての難度は標準レベルといえます。

８割程度の肢が大原の理論テキストの知識だけで判定できるため、大原生は高得点が可能です。基本論点を網羅的に学習していた受験生にとっては、高得点が期待できる良問であったと思います。

二葉　それでは、個々の問題の難度と目標ラインをお聞かせください。

新井　Ａランクは問題１、問題２、問題７、問題８、問題９、問題18、問題19、問題20の８問です。問題１と問題２は会計学の基礎的な内容からの出題であり、誤りの肢が明確に判定できるため、容易に正答可能です。問題18は計算の知識も活用すれば、すべての肢が判定できるため、容易に正答可能です。残りの５問もほぼすべての肢が大原の理論テキストで学習している基本的な論点から出題されており、大原の「短答直対演習」と「短答実力養成演習」で的中している肢が多く含まれているため、容易に正答可能です。

残りの３問がＢランクです。

問題11は、エの肢が難度の高い適用指針の内容のため、Ｂランクとしました。この問題は落としてもやむを得ないでしょう。問題13は、アとイの肢が難度の高い実務指針の内容のため、Ｂランクとしました

目次へ

財務会計論（理論）　新井 孝志

が、ウとエの肢は大原の「肢別チェック」と「短答直対演習」で解いている内容でした。ウとエの肢を誤りと判定できれば消去法で正答の番号を選べるため、大原生には正答可能な問題です。問題15は、エの肢が難度の高い適用指針の内容のため、Ｂランクとしましたが、残りの肢は大原の理論テキストで学習している内容であり、正答可能な問題です。

Ｂランクのうち１問でも正答できれば非常に有利になりますが、Ａランク８問を確実に正答して、11問中８問を正答することが、財務会計論（理論）の目標です。

二葉　わかりました。財務会計論（理論）は、前回と同様、高得点が期待できそうですね。

目次へ

過去問分析の価値と短答対策について

二葉　さて、次に今回の出題傾向を踏まえて、今後の短答対策のポイント等をお聞かせください。

企業法

基本＋α

高田　前回もお話しましたが、出題傾向にかかわらず、まずは「基本的な知識を確実にする」ことが何より大切です。テキストの太字の部分や肢別チェックのＡＢランクを固めることが必要不可欠です。しかし、最近の本試験ではテキストの太字以外の部分（アスタリスクの部分を含む）からの出題も増えつつあります。ですから、時間の許す限り、テキストの太字以外の部分（アスタリスクの部分を含む）も確認しておくと点数を取りやすくなると思います。

　ただし、最初からテキストの太字以外の部分も含めて覚えようとすると、情報量が一気に増えてしまいます。そうすると情報の海に溺れてしまいますので、とにかくまずはテキストの太字の部分や肢別チェックのＡＢランクを固めてください。プラスアルファの部分は、あくまでもその後です。

管理会計論

Ａランク問題をしっかりと

水野　今後の短答対策としては、Ａランクの問題を確実に得点するための、計算力を身に付けること、そして、正誤判断をするために、テキストを読み込むこと、こちらを繰り返してまいりましょう。どうして

目次へ

も、本試験が怖いという印象の強い科目ですので、得点すべき問題をミスなく正答する、この姿勢を持つようにしてください。管理会計論での合格点とは「周りに負けない点数」です。他の科目に比べて、時間的制約の大きい管理会計論では、直前期には“費用対効果”を考え、細かい論点ではなく、負けない、踏みとどまる点数を確実にとる、ということが求められます。悪いなりに常に一定以上の点数をとる、ということを求めましょう。

※試験会場イメージ

この戦い方の場合、Aランクでの取りこぼしは致命傷になりますので1問1問を速くかつ正確に解く力が要求されます。そこで、計算については、演習の復習優先度Aランクの問題や問題集を学習の中心教材とし、これらの中で解けない問題、時間がかかる問題があるならば、まずはそれを速く解けるようにすることが大切です。できなかった問題、時間のかかる問題を

目次へ

ピックアップし、間を空けずに短期間で繰り返し解くことが求められます。基礎的な計算力、すなわちAランク問題に対する精度とスピードが付いてくれば、時間のかかりそうな問題、内容が難解な問題を見極める力も必然的に養うことができるので、手堅く、かつ効率的に点数を積み上げることができるようになります。また、ここまでできるようになったのを前提として、自習時には意欲的に難しい問題、例えば演習で復習優先度Bの問題と戦うことも大切です。ワンランク上の問題を高地トレーニングとして経験しておくことで、基礎的な問題がより確実に正答できるようになるからです。

監査論

基礎が何よりも重要！

栗田　まず、過去問は、繰り返し出題されていますが、演習や「肢別チェック」において、情報提供しておりますので、それを確認していただければ十分です。ご自身で過去問分析を行う必要はありません。

次に、今回は少し難しくなっておりましたが、最近の短答式試験の監査論は、基礎的な知識で7割得点できるような出題となっています。しかし、正解できる問題の全ての肢を容易に判断できるというわけではありません。判断が難しい肢を避け、判断が容易な肢を確実に見極めなければなりません。

そのためには、基礎的な知識について、正確に、漏れなくおさえることが重要となります。テキスト、「肢別チェック」、演習を繰り返し学習することにより、

目次へ

基礎的、典型的な問題に対応できる知識を確実に習得してください。

※試験会場イメージ

財務会計論（計算）

練習量を確保する

瀧本　財務会計論（計算）に限りませんが、短答式試験ではＡランクの問題を確実に正答することが大切です。そのためには十分な練習量を確保することが求められます。講義期には講義の復習にあたってしっかりと問題集に取り組み、繰り返し問題を解く必要があります。さらに演習期に入ってからも演習の問題を繰り返し解くことが大切です。大原の演習は本試験の出題傾向を反映して作りこまれていますので、演習を繰り返し解き直すことでＡランク問題が確実に解けるようになるはずです。

　あとは、解くべき問題を見抜く力を養い、さらにひっかけ問題に対応できるようにするため、知識を体

目次へ

系的に整理することが必要です。そのためには、問題演習の過程で気になったところについてこまめにテキストに戻って確認をするようにしてください。

財務会計論（理論）

ポケコンと短答実力養成演習で基本論点を網羅する！

新井　理論の出題範囲である会計基準・適用指針等の規定は膨大な量があります。大原のテキストは、過去問を分析したうえで、これら膨大な量の中から出題の可能性が高い基本論点を抽出し、必要最小限の内容で合格点がとれるように作成しています。また、「肢別チェック」と「短答実力養成演習」は、再び出題される可能性が高い過去問を取り入れていますので、これらの問題を解けば、過去問対策も十分です。財務会計論（理論）の「短答実力養成演習」は、巻末に確認問題を収録し、基本論点を効率的・網羅的に復習できるようにしています。

　テキストと短答対策用のインプット教材である「ポケットコンパス」を利用して基本論点の理解と暗記を進め、「肢別チェック」と「短答実力養成演習」の問題演習を通じて、これら基本論点に関する知識の精度を高めれば、Aランク問題は確実に正答できるようになります。あとは本試験と同レベルの「短答直対演習」を通じて実戦経験を積み、短答対策を万全なものとしてください。

二葉　合格点を取るには、どの科目も細かな知識に走

目次へ

らず、正答すべき基本的な問題を確実に取るというスタンスで共通しています。

テキストを読み込み、情報を整理して基礎的な知識の精度を高めて肢の判断力を養うことが必要だということですね。

先生方のお話しから、今後も短答対策の学習の基本的なスタンスは従来と変わらないということがわかりました。

ご参集の先生方、昨日の模範解答の作成でお疲れのところ、誠にありがとうございました。

それでは、これで令和５年第Ⅰ回短答式試験の振り返りを終了いたします。

目次へ